

人物の生き方に触れる道徳の授業

～生き方のモデルをもつために～

乾 道夫¹・竹内善一²

¹鳥取大学附属小学校

²日本道徳教育学会理事 元鳥取大学教授

昨年度、本校道徳科では「はじめ（自我関与段階）、中（共有化段階）、おわり（自己内対話）」という授業の流れを学びのプロセスとして提案した。今年度は実在する人物を扱い、昨年度の授業の流れに加えて、人物の生涯を通してみることのできる学習、内容項目のつながりが見える学習について提案する。失敗や弱みも含め、人物の生涯を通してみることのできる教材を提示し、考えを伝え合い深め合うことを通して、「自分もこうなりたい」と将来に希望をもつ子供を育成することができるか検証した。検証授業には、中江藤樹と二宮金次郎を教材化して扱った。中江藤樹が「孝」の行いを実践する姿に、感謝の念が元になっていることに気付くだけでなく、誠実さや礼を尽くす姿など、他の価値観と結び付けて考える子供の姿が見られた。また、二宮金次郎が苦しい中で勉強に向かう姿から、努力や強い意志に目を向けるだけでなく、その努力を支える家族の存在や公共の精神、郷土を思う気持ちに目を向ける子供の姿が見られた。偉人と呼ばれる実在した人物を学習することで子供は様々な価値観に目を向け、「こうなりたい」と生き方への思いを強くすることが分かった。

キーワード：内容項目のつながり、価値観、偉人、生き方

1 はじめに

1.1 道徳科の未来へつなぐ授業づくりの視点

将来に向けてわたしたちが「こうなりたい」と思いを致すのは、夢をもち目標を設定し、それを叶えたいと強く願うときであろう。そのとき、自らと同じ夢を目指して努力を重ね実現させた人物、失敗し挫折しながらも起き上がり諦めずに立ち向かった人物など、自分の生き方にどこか重なるような生き方をした人物に出会い、その人となりに触れることができたなら、なりたい自分になるために、わたしはどのように生きればよいのかという生き方のモデルをもつことができるのではないかと考える。

ところが、今を生きる若者に目を向けると、定職に就かずアルバイトをしながら生活をしたり、フリーターやニートと言われる状況にいたりする人がかなりの数に上るのが現状である。15歳から34歳の非労働人口のうち、家事も通学もしていない者を若年無業者という。厚生労働省が発表しているデータによると、その人数は2000年に入り60万人を超えた。2017年には54万人と報告されており、少なくなったように感じるのだが、15歳から34歳までの人口自体が2000年より少なくなっているため、決して少なくなったとは捉えられないのが実態である。特に30歳から34歳の若者にその数が多いとのことである。こうした状況にある人たちに、「こうなりたい」と思いを致し、自分の生き方のモデルを見付け、生き方を考える時間が幼少期にあったのだろうか。

警察学校や看護学校での講師経験を有する本校道徳科共同研究者の竹内によると、警察学

校や看護学校で学ぶ学生に対して、小学校や中学校で学んだ道徳の学習で、自分の生き方に影響を与えるような、心に残った授業があるのかを毎年のように尋ねても、学生の手が挙がらないのが実態であるという。また、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（2018, p. 1）には、我が国の道徳教育について、学校や子供の実態などに基づき道徳教育の重点目標を設定し充実した指導を重ね、確固たる成果を上げている学校がある一方で、歴史的経緯から道徳教育が忌避される風潮があること、他教科に比べ軽んじられていること、登場人物の心情理解のみに偏った指導が行われる例があることなど、多くの課題が指摘されているとある。特別の教科となって3年目を迎える道徳科である。学級の子供たちが、「この学習では、こういう発言を先生は求めているのだな。」と感じ取って発言する道徳の授業ではなく、自分自身を見つめ、どのようにになりたいのか、どんな生き方をしたいのかとこれから見据えて発言する道徳の授業にしたい。そのためには、「こうになりたい」と思いを強くもち、憧れを抱くことができる人物に出会わせること、その人物からどのような姿を生き方のモデルとして獲得できるのかを考えることができる授業を構想することが重要であると考えた。

道徳の学習では、子供の感性を揺さぶる資料と発問が大切である。子供が人物から、自分の生き方のモデルとなる姿を考えることができる資料と発問を用意することで、「この人のようにになりたい」「こんな姿が、自分の目標につながる」と、自分の夢や目標につなげながら思考することのできる学習にしたいと考えている。

1.1.1 道徳科特有の見方・考え方

道徳教育の充実に関する懇談会による報告「今後の道徳教育の改善・充実方策について」（2013）では、道徳教育について「自立した一人の人間として人生を他者とともによりよく生きる人格を形成することを目指すもの」と述べている。そのためには、ルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて、悩み、葛藤しながら考えを深め、自らの生き方を育てていくことが求められる。そのため、道徳科以外における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によって補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させ、統合させたりすることが大切である。自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことができると考える。つまり、これまでのように知性や心情の理解のみに偏った指導ではなく、様々な視点から生き方について考えられるようにすることが大切であると考え。1時間の授業の流れも毎回同じ（導入→展開前段→展開後段→終末）ではなく工夫が求められる。教材も創作文だけでなく、名言や詩、動画や伝記など、様々なものを活用したい。なかでも、実際に生きた人の生涯を通して考えることができる偉人を取り上げることを提案したい。

1.1.2 道徳科の提案する学びのプロセス

昨年度、本校道徳科では「はじめ（自我関与段階）、中（共有化段階）、おわり（自己内対話）」という授業の流れを学びのプロセスとして提案した。1時間の授業において、はじめの段階では道徳的な価値観に対する今の自分を可視化することを試みた。中の段階では教材を通して得た自らの考えを他者と伝え合い、対話することを大切に、多面的・多角的な見方や考え方をもつことができるように工夫を重ねた。おわりの段階では話合いの中から出された意見を基に、自己の生き方にプラスに働くものを得たり、今後も問い続けたいものと向き合ったりすることができるような終末を試みた。

今年度は実在する人物を教材として扱う。はじめの段階では人物の一生を振り返り、どのような人だと感じたのか、その捉えを出し合う時間とする。事前に教材を配布し、読み物教材や年譜を読み深め、生き方に触れることで、その生き方のどこに感じ入ったのかを確認し合う。中の段階では、人物の姿から考えを深められるよう、その人物の行いに目を向け、考えを伝え合う。この際、子供の発言に対して切り返すことで、子供の考えをより深く感じることができるようにする。おわりの段階では、人物の姿からどのような生き方を学んだのか、

人物のどのような姿が自分の糧になるのかを考えさせる。そのうえで、今年度は次のようなことを提案したい。

① 人物の生涯を通して見ることのできる学習

人物のよい面だけを取り上げる資料は切り身のようで、人物の全体を見ることができない。挫折や葛藤があり、それを乗り越える力があるからこそ、その人物の魅力に触れることができると思う。生涯を見通すものであるため、分量の多い教材となる。そのため、教材は事前に配布し、読ませたり調べさせたりすることで人物の姿にしっかりと触れさせるようにしたい。全体を見通すことが難しい教材の場合は、人物の挿話を紹介したり、書籍を教室内に配架したりして、人物の生き方に触れられるようにする。

② 内容項目のつながりが見える学習

人物に魅力を感じるのは、その人を総合的に見るからこそである。いろいろな価値観を包含しているからこそ、人の生き方に感動し、自分も「こうなりたい」と感じられるのだと考える。そこで、人物の生き方の中心となる価値を支えるものは何であるかを考える発問をし、価値同士のつながりが見えるよう学習を展開する。

1.2 道徳科の未来へつなぐとは

人物教材を用いた授業では、資料化された教材の中に現れる人物と出会い、その人物の考えや思い、生き方に触れる。様々な人物の生き方に触れ、そこから自分の生き方のモデルを見付け、生き方を考えることを道徳授業で行うことを通して、夢をもち、生き方に学び、「こうなりたい」と思いを致す子供を育てることが、道徳科の未来へつなぐということであると考える。実在した人物に教材を通して出会い、生涯に触れ、成功した部分だけでなく葛藤や悩みなどに触れることができる教材を扱うことが大切であると考えます。

2 問題の所在

小学校学習指導要領解説（p. 102）には、教材の開発と活用の創意工夫について次のように書かれている。

子供の発達段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること。特に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、子供が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。

教科化以前の道徳の時間では、副読本の資料だけでなく、授業者が思いをもって子供に出会わせたい人や出来事を資料化した自作資料を扱うことがあった。ところが、教科書を扱うようになり、授業に扱う教材は教科書の内容でなくてはならないのではという声を耳にすることがある。副読本を採用しない学校があったことなどを考えると、教科書があることで、全国どの学校でも道徳の時間に同じような水準で指導されるようになると考えられる。しかし、教科書の教材だけを扱うとなると、子供の実態や地域の実情を考慮した教材を教師が思いをもって作成することに取り組むことがなされなくなるのではないかと感じる。上記の通り、教材の開発を学習指導要領は否定していない。むしろ、子供の実態や地域の実情を考慮し、充実した教材を開発し活用することを求めている。主たる教材として教科書を使用すべきことは言うまでもないが、多様な教材を併せて活用することが重要である。

上記に挙げた題材のうち、先人の伝記には、生きる勇気や知恵を感じられるだけでなく、人としての弱さや葛藤に触れることができ、生きることの魅力や意味の深さについて子供たちが考えを深められることが期待される。子供に出会わせることで、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられる人物であること、子供が深く考えることができる教材であることが重要である。このような教材を作成し、迷いや葛藤に触れ、人物のよさを多面的に見ることを通して、子供が生き方のモデルの一つとして人物の生き方を学ぶことができるのではないかと考えた。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

本研究では、道徳の授業で扱う様々な教材の中で、偉人の生涯を扱う。実際に存在した人物の生涯を知り、その生き方に触れることで、自分の生き方を見据えるためのモデルを得ることができるのではないかと考える。人物のよさだけに特化された資料ではなく、失敗や弱みも含め、人物の生涯を通して見ることのできる教材（または教材の参考となる資料）を提示し、考えを伝え合い深めることを通して、「自分もこうなりたい」と将来に希望をもつ子供を育成することができるかを検証する。

3.2 研究の方法

3.2.1 教材の選定

教材の選定においては、人物の生涯を見通せる教材を活用することが大切であると考え。本研究では、本校道徳科の共同研究者が自作した教材を扱うことにした。子供に「出会わせたい」と考えた実在人物を教材化したものである。人物の全体像が捉えられる教材である。人物のよさや功績を挙げるだけの資料では、人間を捉えることができない。うまくいかず悩み葛藤する姿も含め、その人物をまるごと捉えることで、「この人のようにになりたい」「この姿は自分も大切にしたい」と感じることができると考える。教科書教材を扱わないことに関しては、学習指導要領解説（p.100）に「主たる教材として教科用図書を使用しなければならないことは言うまでもないが、道徳教育の特性に鑑みれば、各地域に根ざした地域教材など、多様な教材を併せて活用することが重要となる。」とあり、自作教材等の使用については、年間数時間程度は可能であると考え。

3.2.2 授業における手立て

出会った人物を子供がどのように捉えたのかを確認するための発問を考える。初めから教師の考えた路線に乗せるのではなく、この教材から人物のどのような姿に心を動かされたのかを大切にするとともに、どのような人物の素晴らしさに触れたのかを明らかにするためである。人物のよさは、一つの価値で決まるのではない。子供たちは人物に触れることで、さまざまなよさに触れることができるのではないか。そのため、人物の姿を支えているものは何かを問い、その人物の生き方のどこを自分がつかみたいのかを考えられるよう発問を工夫する。

教材は2週間以上前に配布し、事前に読み深めることができるようにする。資料が長いこと、時代背景の説明が必須であることから、授業中に初めて読んで考えることはできない。事前に出会わせることで人物の生き方により深く触れることができると考える。そこで、教材や年譜を読み深めることや、人物を深く捉えられるように挿話を提示し考えるといった予習をして本時を迎えるようにする。

3.2.3 検証の方法

人物の大切にしている考えや行いを支えているものが何であるのかを考えさせることで、この人物のもつ人間的な価値観を見つめたいと考える。一つの価値だけで授業を完結するのではなく、その価値を支える副次的な価値に目を向けさせたいと考える。こうして人物の姿から得られた価値観を、子供の発言やワークシートの記述から見取る。この人物の生き方から何を学んだのかを確認しながら、子供が「自分もこうなりたい」と将来に目を向けることができたかを検証する。

4 総合考察

4.1 検証授業（1）

主題名 孝をつくすとは【主として B感謝】

教材名 人として生きる道 ～中江藤樹の「孝行」～（自作）

中江藤樹の生涯を教材化し、授業を行った。藤樹が生きた江戸時代は、わたしたちの生きる現代と異なる点が多いが、授業までに時代背景について確認をすることで、難しさを感じる子供は少なかったように感じる。藤樹に興味をもった子供は、人物について調べたり、担任が準備した本を読んだりして、教材には書いていない事柄についても調べる様子が見られた。

事前に配布した教材から、子供は藤樹について【優しい、頭が良い、多くの人に尊敬された、命がけで行動する人、いつも正しい行いをしようと心掛けていた】という人物像を描いたようである。以下、発問と子供の反応を図示し、考察した。

- 命の危険のある脱藩までしてふるさとに帰ったのはなぜだろう。
- ・母を失いたくない
 - ・自分の命と同じぐらい母の命が大切だ
 - ・藤樹にとって一番大切なのは母である
 - ・これ以上、大切な存在を失いたくない

図1 発問に対する子供の反応1

脱藩は江戸時代の武士にとっては大罪であり、追っ手を差し向けられて殺されてもおかしくないことであった。そこまでして母の元へ帰るのは、藤樹が何を一番大切に思っていたのかということの子供は考えていた。藤樹にとって、親への「孝」の行いが全ての行動の根本にあったということに気付かせるようにした（図1）。

- 藤樹が多くの人に影響を与えられたのはどうしてだろう。
- ・自分のことより人のために尽くしたから
 - ・多くの人が藤樹の行いを見ていたから
 - ・藤樹の教えが弟子へ、またその弟子へと受け継がれたから
 - ・人に教えるだけでなく、自分が率先して行ったから

図2 発問に対する子供の反応2

藤樹は家族を愛し、敬うことが大切であると多くの人に説いた。しかし、彼の「孝」の行いとは、親孝行だけでなく友人、知人、上司、部下など、自分に関わる人や、初めて出会ったその場限りの出会いなど、全ての人への行いであった。彼自身の勤勉さ、素直さ、優しさ、勇気をもって行動する姿、努力など、藤樹の価値観が人々に受け入れられたからこそ、多くの人にその考えが伝わり、今に受け継がれているのだと考えることができた（図2）。

- 藤樹先生の生き方から学んだものは何だろう。
- ・自分の考えを通すことの大切さ
 - ・どんな状況でも人のことを大切にする姿
 - ・誰に対しても優しい姿
 - ・欲のない姿

図3 発問に対する子供の反応3

子供は藤樹の生き方から、他者への感謝が行いの元になっていると感じる様子が発言やワークシートから見られた。しかし、誰に対しても誠実で正直な姿、思いやる行動、礼を尽くすことの大切さに目を向け、記述する様子も見られた。また、藤樹のことを「藤樹先生」と呼ぶ子供の姿も見られた。子供の心の中に、藤樹がただの先人ではなく、まさに「師」として入り込んだ瞬間ではなかったかと考える。この学習から、人のことを思い、自分の考えを曲げないで行動する人物を教材化して扱うことで、自分の生き方の「師」、すなわちモデルとなる生き方を獲得しようとする子供の姿が見られることが分かった（図3）。

4.2 検証授業（2）

主題名 勉強が自分をきたえてくれる【主として A 希望と勇気、努力と強い意思】

教材名 「金次郎の決意」（作成者 本校道徳科共同研究者 竹内善一）

江戸時代の農政家、政治家である二宮金次郎を教材化したものである。この授業では夢や目標に対するモデルとなる生き方を得ようとする子供を育成したいと考えた。勉強すること

で身を立て、人のために尽くした金次郎の姿から、勉強することの意味を考え、努力することの大切さに目を向けさせたいと考えた。

- 何が金次郎をそこまで勉強に向かわせたのだろう。
- ・皆のためという思い
 - ・もっとしっかりした人になるため
 - ・賢くなるため
 - ・災害に立ち向かうため
 - ・父の姿を見ていたから

図4 発問に対する子供の反応4

金次郎の父親は大変優しい人であったが、自分が苦しい状況であるにも関わらず人のために金を貸すなどし、一家が没落する要因を作ってしまった。その様子を見ていた金次郎は、生き抜くためには賢くならなくてははいけないと考えたのである。勉強をすることで、自分を生かし、社会に貢献することができるようにしなくてはならないと考えた金次郎の姿に、工夫する力や判断力の大切さ、気付く力の重要性に目を向ける子供の様子が見られた(図4)。

- 苦労して勉強したことが金次郎にもたらしたものは何だろう。
- ・気付く力
 - ・小さなことを積み重ねることの大切さ
 - ・人の役に立つ力
 - ・生きるために必要な力
 - ・自らの状況を立て直すことができる強い心

図5 発問に対する子供の反応5

金次郎の姿やエピソードから、勉強をすることで得られるものは何かを真剣に考える子供の様子が見られた。捨てられた物、もう必要ないと思われる物が、実は大きな価値ある物となることに気付く目をもつことができたのは、金次郎が勉強をしてその有用さを知っていたからではないかと考える。勉強をすることで、将来への希望や強い心を得ることができるとに気付くことができた。しかし、本授業では勤労、公共の精神、家族愛、国や郷土を愛する態度といったところに目を向けている記述も見られた。中江藤樹の学習とのつながりを考え、「こうなりたい」と考えることで、将来に向けて努力を続けられると考える子供もいた(図5)。

4.3 考察

今回の検証授業では、2人の偉人を教材化して扱った。それぞれ、主とした内容項目は異なるが、子供はその内容項目に挙げられた価値観だけでなく、先述したように様々な価値観を得ることができたと考える。

中江藤樹からは、他者への感謝、誰に対しても誠実で正直な姿、思いやる行動、礼を尽くすことの大切さといった価値観を見出し、子供自身がそうなりたいと感じる様子が見られた。二宮金次郎からは、将来への希望、強い意志、勤労、公共の精神、家族愛、国や郷土を愛する態度といった価値観に目を向ける子供の様子が見られた。偉人を教材化することで、子供は「こうなりたい」と強く思う様子が見られた。それは、この世の中に実在していた人物であるということが大きな強みなのではないか。創作された人物には見られないその人の実績や言い伝えがあり、そこに至るまでの葛藤や失敗、苦労や悩みなど、わたしたちと同じように苦しむ様子があることに気付くことができたからこそ、偉人をどこか遠くの人、自分たちと違う凄い人という視点ではなく、苦しんできたことはわたしたちにもつながると感じられ、「自分にもできるかもしれない。」と感じることができるとは思われる。

これらの授業後に、図書館で他の偉人に触れてみると、本を持って生き生きと私に紹介した子供がいた。もっといろいろな人物の生涯に触れたい。自分の生き方を考えたいという思いがあるのではないかと考える。

4.4 研究のまとめ

4.4.1 結論

2つの検証授業から、偉人と呼ばれる実在した人物を教材化して学習をすることで、子供は様々な価値観を獲得し、「こうなりたい」と生き方のモデルの一つとして人物に触れること

が可能であると言える。将来の夢を既にもっている子供にとっては、悩みながらも自分の夢を実現した人物がいることを知り、目標に向かってどのような生き方をしたらよいのかを考えることができる。まだ夢をもっていない子供もいるが、だからこそ信念をもって生きてきた人の生き方に触れることで、自分の生き方を考えさせる必要がある。

4.3.2 課題

この授業で扱った人物の姿から、自分が「こうなりたい」という思いを獲得できなかったのではないと思われる子供の姿もワークシートから見られた。人物の生き方と子供の欲する生き方が合わないということもあるのではないだろうか。しかし、過去に担任をしたある子供は、偉人と出会う学習から伝記を読み始め、様々な人物に触れていった。中には自分の考え方に合わない人物もあったそうだが、偉人に触れることは「どう進めばよいか」を考えきっかけになると話していた。生き方のモデルをもつために、出会わせる人物に多様性をもたせることを今後の課題としたい。

4.3.3 今後の展望

今回取り上げた人物は、ともに江戸時代を生きた男性であったのだが、現代に生きる人物、女性、外国の方など、様々な人物に触れるようにすることも必要である。教科書に取り上げられる人物も一時期より多くなった。教科書で扱われる教材でも、生涯を通して生き方に触れることができるよう工夫して扱うようにする。具体的には、人物について深く触れることができるように書籍を準備すること、事前学習で人物について調べたり、教科書で触れられていない逸話を紹介したりすること、年譜を準備し、生涯が見通せるようにすることなど、工夫することでさらに人物の生き方に触れられるようにしたい。

【文献】

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 廣済堂あかつき
厚生労働省ホームページ 図表 1-3-7 若年無業者数 <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/18/backdata/01-01-03-07.html>（最終閲覧日：2020年10月8日）
道徳教育の充実に関する懇談会（2013）「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/dai16/sankou1-1.pdf>（最終閲覧日：2020年10月8日）